2012年8月15日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

第二十三号

Sendai Literature Museum News

東北大学医学部

文学のある風景

父の歌

インターンが終りに近づき、医師国家試験を前にして相変らず恥多き怠惰な日を送っていたとき、とうに老衰していた父の死の報知を受けた。しかも手ひどい宿酔のなかで私は電報を受けとった。東京に電話をしたとき、すでに父はことときれていた。最後まで、私は親不孝者であった。父が死ぬとき、最後の注射の一本は私の手で打とうとひそかに念じてもいたのに。

東京へ戻る夜汽車の中で、私は大学にはいってから手にとることのなかった父の処女歌集『赤光』をあてもなく開いて過した。あれこれの懐しい歌たちが、ふたたび私の胸を痛切に貫いた。こういう歌をつくった茂吉という男は、もうこの世にいないのだな、もうどこにもいないのだな、と幾遍も繰返し考えた。

目をあげると、外の闇は雨となっており、こまかい水滴が車窓を伝わって流れた。私はそれを見つめ、自分が父に対して抱いていた感情は、また或る種の強い愛であったことを更めて反芻した。その父が死ぬときになって、そのできのわるい息子がようやく性にも目ざめ、つたない草稿をかかえているのも、一つの凍えた宿命であり循環であるような気がした。

私はそのとき、カバンの中に、ほとんど完成しかけた自分の最初の長篇『幽霊』のかなりぶ厚い原稿を入れていた。

(北杜夫「学問と愛について」『どくとるマンボウ青春記』)

『どくとるマンボウ青春記』
(新潮文庫　2000年)

小池 光の 気になる日本語 12

「的」

最近読んだ歌集のなかにこういう歌があった。

僕的にはありだと思ふんですよね
と言ふ若者よ殴つてもよいか

作者は大辻隆弘さん、三重県の高等学校で国語の先生をしている。生徒を呼び出して注意したらこのように答えた。思わずブン殴ってやろうかと思って、もちろん殴りはしなかったが、カチンと来るものがあったという歌である。場面が浮かぶようで、近年まで同じ仕事をしていたわたしにはとてもよく身に沁みる。

なにがカチンと来たかというとその言い回しだ。「僕的」という主語の出し方がまず気に入らない。これはどういう意味かというというまでもなく、「僕としては」というべきところを「的」で受けているのである。

そもそも「的」という日本語は、主観的、客観的、総合的、部分的のように用いて抽象名詞を受ける。岩波の国語辞典によれば「名詞に添えて『…のような』『…の性質を帯びた』『…の状態をなす』などの意を表す」とあるのがそれだ。つまりボカすわけである。

「私的」というのはなにもおかしくない日本語だが、これはシテキと読むので、ワタクシテキとは読まない。ところがこれをワタクシテキと読んで、別の意味に転化し、やがて「僕的」「じぶん的」さらには「おれ的」などという言い回しが出来てきたのかも知れない。

「僕は」で必要十分なところ「僕的には」といわれると妙に自分の影が薄くなり、無責任のようにさえ感じられる。岩波の記述に添えば「僕のような性質を帯びた」とでもなるところで、自分が曖昧化して、さらにいえば自分が自分でないようにも感じられる。そこが大辻先生はカチンと来たのであった。

しかし、「的」の一語をつけただけで妙に自分の影を薄くする手技には、ちょっと感心してしまう面もないわけでない。うまい日本語を発明したということである。

先日奥歯が痛んで歯科に行った。歯には異常がないので歯の奥の部分が炎症を起こしているのかも知れない。いっぺん耳鼻科で診てもらうようにといわれた。それで耳鼻科へ行ってレントゲンを撮った。それを見て耳鼻科の若い女の先生が「耳鼻科的には問題ない」というのでおかしかった。こういうところにも「的」がつくのである。その「的」はあんまり違和感がなく、先生をぶん殴ってやろうかという気持ちはぜんぜん起こらなかった。

学芸室日記

○5月8日、北海道旭川市にある三浦綾子記念文学館のスタッフの方々が来館し、『三浦綾子全集』をご寄贈くださいました。震災後、全国の三浦文学ファンからの「いまこそ、三浦綾子さんの本を読んでほしい」との声を受け、三浦綾子記念文学館が被災地への三浦作品寄贈を呼びかけて集まった本でした。本を寄せて下さった全国の皆さま、記念館の皆さま、ありがとうございました。

○これは一見すると普通のお盆ですが、裏を返すとなんと版木!

「北斎漫画展～江戸の出版文化」(4月21日～6月17日)開催中に、市内にお住まいの方が持ってきてくださいました。版木は何度も摺ると表面が摩耗するので、表面を削って再利用されるが、最後は焚き付けに使うことが多いので、残るのは珍しいとのこと。そんな中この版木はお盆として甦りました。

○7月14日からスタートした「夏休みこども文学館」。今年は「グランドファザーズ・レター展」を開催しています。イギリスのおじいちゃんが四人の孫たちに送った、かわいいイラストが描かれた愛情たっぷりの絵手紙をご覧いただけます。100年近く前のものですが、愛する者を思う気持ちは、時代や国境を越えて変わりません。常設展料金でご覧いただけます。またこどもたちが楽しみにしている「お話会」もあります。8月26日まで。

○8月19日には「文学館まつり」を開催します。古本マーケットや地元でとれた野菜販売があるほか、ウサギと遊んだり、射的をしたり…「文学」とどう関係があるの?という固いことは抜きにして、文学館にまだ一度も行ったことがないという方はぜひこの機会に遊びにいらしてください。あのかわいいキャラクターぐ○りに会えるかも…10:00から16:00まで。

仙台文学館ニュース　第二十三号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.sendai-lit.jp/

[表紙写真] 佐々木降二
[印刷] (株)コーメディア
[挿画] 古山 拓

再生紙使用 VEGETABLE OIL INK

シリーズ 私の一冊 第十八回

森内俊雄『短篇歳時記』

池上 冬樹

小学四年生のころから本に親しみ、さまざまな小説を読んだけれど、いちばん最初に強い影響をうけたのは、高校時代に出会った福永武彦の『忘却の河』だろう。はじめて小説を読んで泣いた本であり、これで日本文学に目覚め、大学では日本文学科を専攻したのだが、大学時代に結城昌治とロス・マクドナルドに出会い、だんだんと海外ミステリ（エンターテインメント）に向かうことになる。

その一方で、日本文学への愛も続いていたのだが、さすがに三十代以降は、仕事がら海外ミステリの比重がまして読む機会が減っていった。それでもあきずに読み返した作家が何人かいて、名前をあげるなら吉行淳之介、立原正秋、小川国夫、森内俊雄となるだろうか。とくに森内俊雄は僕の人生とともにあったといえるかもしれない。僕にも、悩み苦しみ深い森を彷徨っていたような期間があり、そのときの大いなる慰めとなったのが森内文学であり、下手な小説を一生懸命に書いていた時代には、森内を手本にして何作も書き写したほどである。

そんな森内の中から一冊を選ぶなら、『短篇歳時記』（講談社、一九九九年）になる。本の帯に"俳句十七文字からひろがる百の風景"とあるように、俳句に発想を得た掌篇が百収められている。俳人遠藤若狭男が選んだ俳句が、それぞれの作品のタイトルとなっていて、「俳句と短篇が、たがいに呼応するように、試みてみました。小説による俳句鑑賞、と読んでくださっても結構です」と森内は前書きにさらりと書いているのだが、これは大変な作業である。なぜなら一篇の枚数は約五枚。五枚のなかで俳句に呼応するような小説世界を作り上げるのは並大抵のことではないからだ。

だいたい"呼応"といっても、俳句の説明になっていては作家の負けであろう。いかにして省略に省略を重ねた秀句と張り合う世界を作り上げるかである。大げさにいうなら、作家の創造力の限界に挑戦した作品といえるだろうし、森内はその困難な挑戦に悠々とのぞみ、結果的に俳句と対峙しうる見事な世界を構築している。いやはや、これは凄い。

たとえば、「ともしびや酢牡蠣と啣みし柚子の種」（永井東門居）では、灯した火のもと酢牡蠣と柚子の種を啣みしめるというわびしき歌をキッチン・ドリンカーの主婦にあてはめて絶望感を深め、「ゆで玉子むけばかがやく花曇」（中村汀女）では、老いたる母親の生命感を花曇りのなかに写し取り、「ことときれてなほ邯鄲のうすみどり」（富安風生）では、青年が婚約者をつれて祖父母が住む故郷を訪ねて幽玄に入りこみ、「木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ」（加藤楸邨）では、癌の再発を静かに受容する内面を捉え、「理火や隠しおほせぬこと一つ」（透乙美）では、夫が突然美しい西洋人形に溺れてしまう不可解さを詳らかにし、「ゆきすぎて戻る風あり芒原」（沖祐里）では、中年男と若い女の陰惨な火遊びを象徴的に鋭く描く。混沌とした生と性の欲望をみつめながら、生きることの危うさと儚さ、哀しさを、実に静謐な筆致できりとっているのである。

森内俊雄『短篇歳時記』（講談社）

森内はクリスチャンであり、川端康成に絶賛されたデビュー作『幼なき者は驢馬に乗って』や『骨の火』など宗教文学の秀作を発表している。存在のむこうにあるものをたえず凝視する作家であり、気のきいた、よく出来た短篇で終わるものなどひとつもない。具体的にいうなら、「ともしび」では"ともしび"をベランダから主婦を見つめている鳩の赤い目にしてアル中の主婦の嘆きを人間の根源的な存在の悲しみにまで昇華しているし、「ゆで玉子」ではラスト八十過ぎの母親が"さとすがごとく命の石段を降りて行く"と書いて老いる内実を輝かせ、「ことときれて」では幽霊の視点から五感を通してみずみずしく尊い命を描ききっている。

森内文学を俯瞰するなら、この時期から平易でおだやかな様子の小説が多くなった。アルコールと薬物に耽溺し、幻視とエロスの世界を探るような、そんな凄絶な世界は影をひそめている。聖書を引用して韜晦を決め込み、分かるものが分かればいいといった姿勢も薄らいで、ある種の枯れた味わいすら出ている。しかし表面的にそうであっても、その作品の底には森内文学の特徴である"憐れみ"が確かに流れていて、しばし読者は温かな（森内の愛用語を使うなら）"大きな掌"に包み込まれるような感じを抱くのである。

内容からみて、本書の読者は、どうしても俳句ファンになってしまいがちだが、むしろ多くの小説ファンにお勧めしたい。いまだ"発見"されているとはいいがたい「森内俊雄」という偉大な作家の素晴らしさをとくと味わってほしいからである。

池上冬樹（いけがみふゆき）文芸評論家
1955年、山形市生まれ。立教大学日本文学科卒業。2004年4月から3年間、朝日新聞書評委員をつとめ、『週刊文春』『本の雑誌』『ミステリマガジン』『小説すばる』など多くの媒体で書評・評論活動を展開している。著書に『ヒーローたちの荒野』（本の雑誌社）がある。訳書にリチャード・スターク『悪党パーカー／怒りの追跡』（ハヤカワミステリ）、編著に『ミステリベスト201日本編』（新書館）、『よりぬき読書相談室』（本の雑誌編集部、本の雑誌）など。各文学賞の予選委員、下読みもつとめる。仙台の「せんだい文学塾」、山形の「小説家（ライター）になろう講座」では講師・コーディネーターを兼務。文学界の後進育成に力を入れている。

作家を目指す人たちが切磋琢磨 ～「せんだい文学塾」

「いいえ私としては、主人公はもう殺されているという設定で書きました」「でも、最後に"正夢だった"って書いてあるよ。夢を見たのだったら、生きているってことでしょう?」「あれ、本当だ」「問題発言だなぁ（笑）」

とある土曜日の仙台文学館。その一角から熱い議論の声が聞こえてきます。

この日、講習室で開かれていたのは「せんだい文学塾」。月一回、作家を志す市民有志が集う、実践的な文学講座です。

今号の「私の一冊」にご寄稿いただいた池上冬樹さんが毎回のコーディネーターを務めるこの会の前身は、東北芸術工科大学が開講していた「小説家・ライター講座 in SENDAI」。この講座が2010年3月をもって閉講することになり、残念に感じた受講者有志が池上さんの後押しもあって立ち上げたのが、せんだい文学塾です。

「作家志望の方以外にも、講師を務める有名作家の生の声に触れたくて参加する方もいます。東京でもなかなか実現しない企画のようで、遠くからいらっしゃる方も」と語るのは、運営委員会事務局長の安部浩さん。「1年目の最終回が開催されるはずだった日の数日前に東日本大震災が発生し、講座は中止。5月になってようやく会場が確保できて再開すると、待ちわびていたという方が何人も参加してくれて」と振り返ります。

今回の講師は人気ミステリー作家の堂場瞬一氏。その他にゲストとして、大手出版社の第一線の編集者12人が参加しました。作品批評では、文芸作品を世に送り出す立場からの厳しくも真摯な指摘に参加者は皆、熱心に聞き入り、堂場さんと池上さんのフリートークでは出版界の裏話に会場が沸きました。

「講座の後の懇親会での本音トークも、受講の醍醐味」と安部さん。作家を目指す方はもちろん、文学が誕生する場の空気を感じ取りたい方も、物は試し、参加してみませんか。

コーディネーターの池上冬樹氏（左）と堂場瞬一氏

この日は大手出版社の文芸担当編集者12人が勢揃い

せんだい文学塾
http://sites.google.com/site/sendaibungakujuku/
連絡先メールアドレス sendaibungakujuku@gmail.com
連絡先電話番号 080-6013-5008※留守番電話での受付けとなります。
会員制ではありません。講座ごとに参加を受付けています。
できるだけ事前予約をお願いします。

掲載作品はすべて津和野町立安野光雅美術館蔵 © 空想工房2012

特別展

井上ひさしと安野光雅

～文学と絵画の出会い～

2012年
9月8日(土)～
11月11日(日)

安野光雅さんの作品は、透明感あふれる美しい色彩や、そこに散りばめられた遊び心で、世界中の人々に愛されています。安野さんは60冊以上の井上ひさしの木の装画を描き、井上ひさしが座付き作家を務めた「こまつ座」では多くの作品で宣伝美術を担当するなど、共に名作をこの世に送り出した仕事仲間でもありました。

本展では装幀画家、デザイナーとしての仕事に焦点を当て、二人が手掛けた仕事を振り返るとともに、最新の描き下ろし作品、井上ひさし文『ガリバーの冒険』の絵本原画や芝居『藪原検校』のポスター原画をはじめ、代表的な作品をご紹介します。

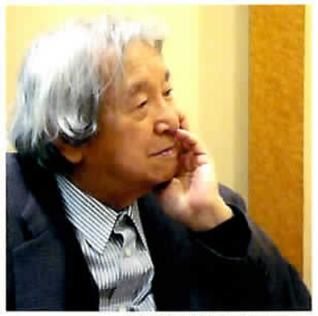
『イーハトーボの劇列車』

こまつ座のポスター原画

『國語元年』『イーハトーボの劇列車』など11作品をご紹介します。原画と仕上がったポスターを見比べると、仕上りが寸分違わずイメージされていることに驚くとともに原画の持つ力に圧倒されます。

『ガリバーの冒険』の装画

『ガリバー』は、文・井上ひさし、絵・安野光雅で1969年に日本リーダーズダイジェスト社から出版された絵本です。この時二人はまだ面識がありませんでした。42年後、井上ひさしが亡くなった後に、本棚から当時の表紙画を見つけた安野さんは、もう一度この絵本を出版したいと思い、絵を描き直しました。新しい絵本には楽しいしかけがかくされています。


提供:津和野町立安野光雅美術館

安野光雅

1926年、島根県津和野町生まれ。1968年、文章のない絵本『ふしぎなえ』で絵本作家としてデビュー。科学・数学・文学にも造詣が深く絵本以外の著作も多い。主な著書に『ABCの本』『旅の絵本』『あいうえおの本』『繪本平家物語』『絵のある自伝』などがある。2001年故郷の津和野に安野光雅美術館が開館。

撮影:佐々木隆二

井上ひさし

1934年、山形県東置賜郡小松町（現・川西町）生まれ。1983年にこまつ座を創設し、多くの戯曲を書き下ろし上演。小説に『手鎖心中』『青葉繁れる』『吉里吉里人』『東京セブンローズ』、戯曲に『父と暮せば』『太鼓たたいて笛ふいて』などがある。1998年から2007年まで仙台文学館の初代館長をつとめる。2010年4月9日没。

グッズ紹介

「グロウブ号の冒険」「イーハトーボの劇列車」の絵はがきセットや、一筆箋など会期中に販売します。また現在「吉里吉里人」の装画で、絵はがき、クリアファイル、ハーフてぬぐいを作製中です。こちらもどうぞお楽しみに。

会期中のイベント

お二人と交流の深い、松田哲夫氏（編集者：元筑摩書房専務取締役）の講演会や、ブックカバー作り、木の街をつくるワークショップを予定しています。詳細は、文学館にお問合せ下さい。

『グロウブ号の冒険』装画

1987年から1989年まで雑誌『世界』に断続的に連載され未完となっていた作品。井上ひさしの死後2011年に岩波書店から出版されました。連載当時安野さんは、前号のあらすじを読んで話の展開を想像しながら挿絵を描いたそうです。

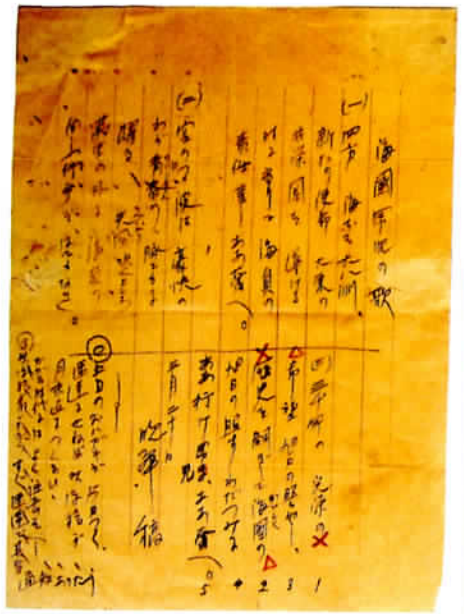
市川市芳澤ガーデンギャラリーにて

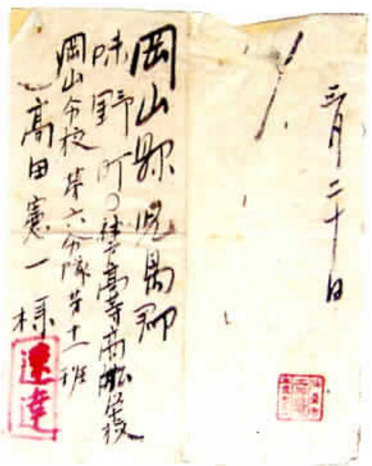
本展をひと足先に開催していた、市川市芳澤ガーデンギャラリーにお邪魔しました。館内にはポスターや本の装幀、絵本などで見覚えのある安野作品約80点が展示されていました。「安野さんは原画絶対主義をとらない。印刷物としてうまく仕上がっているかどうかが問題なのだ。」（山田豊「編集者に苦労なし」）と言われますが、原画の持つ静かな力に圧倒され、一つ一つの作品からは、描くことが楽しくてならないという声が聞こえてくるようでした。

新資料紹介

土井晩翠書簡（髙田憲一宛）

明治の近代詩の夜明けの時代を築いた宮城ゆかりの二詩人、土井晩翠と島崎藤村。当館の常設展示室でも紹介している二人の資料がこの度寄贈されました。今回はこのうち、土井晩翠の書簡をご紹介します。





〔昭和二十年〕三月二十日　土井晩翠書簡　髙田憲一
（封書　便箋一枚　ペン書き）

（表）岡山県児島郡味野町○
神戸髙等商船学校岡山分校
第六分隊第十一班
髙田憲一様　速達

（裏）三月二十日　〔以下印〕
仙台市土井晩翠本荒町二一

海国男児の歌

㈠ 四方　海なる　大八洲、
　新たの使命　大東の
　共栄圏を　導ける
　時に当りて　海員の
　責任重し　ああ奮へ。

㈡ 空うつ波は　豪快の
　わが青春(せいしゅん)の　脉ともに
　踊る　天風(てんぷう)吹くところ、
　萬里の外に　海員の
　向ふ行手ぞ　はてもなき。

㈢ 三千年の　光栄の×　1
　△希望　旭日の照る如し、　3
　×歴史を嗣ぎて海国(かいこく)の△　2
　旭日の照す　わだつみに　4
　ああ行け男(子)児、ああ奮へ。　5

三月二十日　　晩翠稿

◎五日のおハガキが今日つく、速達にせねば此原稿が月末迄につくまい、かかる時代にはよく注意すべし

◎此原稿着いたならすぐ速達で其旨通知ありたし

「星落秋風五丈原」など漢語を駆使した力強い作風で評価された土井晩翠は、『若菜集』を著した島崎藤村とともに新しい詩の時代を築いた詩人として並び称されました。翻訳家としても活躍する一方、明治三十三（一九〇〇）年から昭和九（一九三四）年まで、故郷仙台の旧制第二高等学校で教鞭をとり、「名物教授」として知られました。

今回の寄贈者である髙田憲一氏は、旧制盛岡中学校在学中に国語の副読本に載っていた晩翠の詩に心を動かされ、晩翠にその感動を伝えるべく自作の詩を同封した手紙を送ったところ、思いもかけず晩翠から詩の添削が届いたそうです。当時晩翠は二高を退官し、翻訳『オヂュッセーア』を刊行した頃でしたが、その後も何度も詩の添削をしてもらったといいます。神戸高等商船学校への進学と同時に海軍予備役に編入された髙田氏が、昭和二十（一九四五）年四月に横須賀入隊が決ったことを晩翠に知らせたところ、届いたのがこの書簡でした。時局悪化で郵便事情も悪く、五日に出された手紙が晩翠の元に届いたのは二十日。書面からは髙田氏の行く末を思い、晩翠が激励の詩を書いて慌ただしく速達で投函したことがわかります。そのような中でも三番の詩には推敲のあとが見られ、自分を慕う学生への思いと詩人としての矜持が垣間見えます。

残念ながら髙田氏は晩翠の「此原稿着いたならすぐ速達で其旨通知ありたし」という申し出にこたえられず、昭和二十七（一九五二）年に晩翠は亡くなります。多くの学生に慕われた晩翠の篤い人柄が伝わってくる書簡です。

参考：髙田憲一「忘れ得ぬ『海国男児の歌』晩翠忌を前にして」（『東奥日報』昭和六十年十月十四日）

この書簡は現在、常設展示室でご覧いただけます。

70代の晩翠

晩翠をもっと知りたい方には…

若き日の晩翠

◆常設展示室 土井晩翠コーナー

晩翠の生涯や業績をわかりやすくご紹介。晩翠の詩集や、直筆の書簡や草稿などもご覧いただけます。

◆仙台文学館発行 土井晩翠に関する刊行物

『土井晩翠　その生涯と文学』
（二〇〇四年九月発行）　三〇〇円

晩翠の全体像をコンパクトにまとめた一冊。「晩翠の生涯」「晩翠文学の世界」「晩翠アラカルト」からなる。西村和子「晩翠の家族と土佐」、吉岡一男「教師・土井晩翠」所収。

『天地有情』
（二〇〇五年三月発行）　八四〇円

明治三十二年に出版された晩翠の第一詩集『天地有情』を底本にし、『晩翠詩集』などを参照して復刻。久保忠夫「随想『天地有情』」、原子朗「光すゞしき夕月か」、佐藤伸宏「晩翠の詩的想像力」の解説、土井晩翠の略年譜付き。晩翠の詩の世界を味わえる一冊。

＊当館受付で販売中。また郵送でのお届けも行っています。詳しくは文学館にお問合せください。

◆晩翠草堂

（仙台市青葉区大町一－二－二）

戦災で住居を失った晩翠のために、教え子など市民有志が中心となり、昭和二十四年に旧居跡に建てられました。晩翠は亡くなるまでの数年をここで過ごしました。見学が可能です。

開館時間：午前九時から午後五時
休館日：月曜日、年末年始

「展示音声ガイド」サービスが始まりました。

仙台文学館の常設展示室では、来館者のご要望に応え、コーナーごとの解説をヘッドフォンでお聞きいただける「展示音声ガイド」サービスが始まりました。

今年の一月に市の広報誌などで、視覚障害のある方のための展示解説音声ガイドナレーターを募集したところ、フリーアナウンサー、よみきかせボランティア、音訳ボランティアなど、声を通した活動をされている方々が、お役に立てればと手を挙げてくださいました。二月に朗読ワークショップの講師をつとめる渡辺祥子さんと当館職員で審査を行い、最終的に加藤身知子さん、佐藤知子さん、中里えみ子さん、村林いづみさんの四名にお願いすることになりました。事前に下読みを行い、三月にスタジオで収録をして完成。五月の連休明けから運用を開始しました。

心地良い声で展示の解説を聞けば、理解が深まること請け合いです。来館の折にはぜひ一度お試しください。

（学芸員　庄司潤子）